我孫子市指定文化財

杉村楚人冠記念館

旧杉村楚人冠邸園

日本を代表するジャーナリストの理想の郊外生活を実現した家

杉村楚人冠について

杉村楚人冠（本名　広太郎）は、明治末期から昭和前期に東京朝日新聞で活躍したジャーナリストです。調査部や記事審査部の導入、縮刷版の発行、日刊写真新聞『アサヒグラフ』の企画、大学の新聞学科での講義など、日本初の試みを行った先進的な新聞人でした。

また、読みやすい文章に独特の皮肉とユーモアをちりばめた彼の随筆やコラムは、当時人気を博しただけでなく、戦後の文筆家にも影響を与えました。

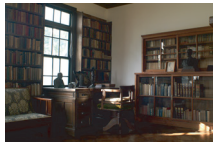
楚人冠は手賀沼の風光を好み、明治 45（1912）年に我孫子に別荘を買い求めます。その後、関東大震災で二子を失う不幸に遭ったのを機に、一家で移住しました。そしてこの地で、手賀沼の景観保護活動に取り組んだり、我孫子ゴルフ倶楽部の開設を町長に進言したりと我孫子の発展に尽力しました。また、湖畔吟社という俳句結社を作って地元の人々と交流するなど、大きな足跡を残し、昭和 20（1945）年に自宅で息を引きとりました。

杉村楚人冠記念館の建物について

記念館の建物は、楚人冠が我孫子に定住する時に建てた母屋を利用しています。当時、建築界の異端児と目された下田菊太郎によって設計されました。しかし、下田の建築に不満を持った楚人冠はたびたび改築を行い、さらに楚人冠の没後にも増築が行われています。記念館の整備にあたり、生前から使われていた部分は、資料をもとに昭和 4（1929）年頃の様子を再現しました。母屋のほか、離れの茶室、我孫子の名工佐藤鷹蔵が建てた現存する中では最も古い「澤の家」と呼ばれる離れ、そして蔵が残っています。

館内のご案内

サロン



楚人冠の胸像、交流のあったジャーナリストの肖像画など、多くの記念品が飾られています。冬には暖炉を使っていました。南側のサンルームは、元は窓がなく、ベランダとして使われていました。

和室

茶室としても使えるように設計されています。押入の中の箪笥はすべて建て付けになっており、楚人冠が地震対策に気を遣っていたことが窺えます。

展示室１

夫人が主に使っていた部屋を利用しています。

展示室２

もとは茶の間として使われていた部屋です。縁側は吹きさらしの濡れ縁だったものが、のちに改築されたものです。

多目的室

もとは台所だった場所です。この部屋でも食器棚を建て付けにする地震対策がとられています。

書斎

母屋完成後まもなく増築された別棟の部屋です。二階があり、寝室として使われていました。